

有形民俗文化財

くばんとうおん
小波本御嶽

指定年月日／1991（平成3）年11月13日
所在地／登野城1400



小波本御嶽は、稲の伝来に関する由来のある御嶽である。八重山にはじめて稲作を伝えたと言われる兄タルファイ、妹マルファイは、安南（現在のベトナム）のアレシンという所から稲種子を持って来住したといわれ、登野城の小波本原くばんとうぼるに家建て、水田を開いて島民に稲作を指導したとされる。

この御嶽は兄妹の住居跡と伝えられ、のちに御嶽として信仰されるようになった。八重山の御嶽によくみられる鳥居や拝殿が無く、原初の形態をとどめしているとされる。

ムトゥオン（本御嶽）、またはウフオン（大御嶽）とも呼ばれ、宇登野城の種子取祭や豊年祭などの農耕儀礼

は、この御嶽と妹マルファイの墓とされる米為御嶽を中心に執り行われている。また、両御嶽は古くから水元の神としても信仰され、戦前から戦後の干ばつの時には、雨乞い行事も行われた。

市指定

有形民俗文化財

みやとりおん
宮鳥御嶽

指定年月日／1996（平成8）年11月12日
所在地／石垣228-1



石垣四ヶ村発祥の伝承をもつ御嶽で、方言でメートウルオンと呼ばれる。『八重山島由来記』（1705年）によれば、「石城山いしすくやまに住んでいたナアタハツ、ピサガーカワラ、マタネマシスの3兄弟妹がここを御嶽として拝み始めると、作物が豊かに実るようになった。すると、人々は彼らを慕い、周りに集まり住むようになった。そして、人々が増え、石垣・登野城両村に発展していった」と伝えられている。

御嶽内は、鳥居、拝殿、イビ手前の木造の門、石造のイビ門、イビ内の祠が南北の軸線上に配置されている。拝

殿は1923（大正12）年に改築された木造入母屋赤瓦葺の建物である。拝殿後方の庭の奥には、イビ垣を囲む栗石積みの石垣があり、その中央に木造切妻造赤瓦葺の門がある。イビ垣内部には、正面と左右に門を開いた石垣で囲われた領域があり、正面の門には琉球石灰岩の1枚岩が載せられている。また、イビ域内には県指定天然記念物のリュウキュウチシャノキも自生している。

宇登野城の御嶽として、豊年祭や折々の祭祀の場となっている。